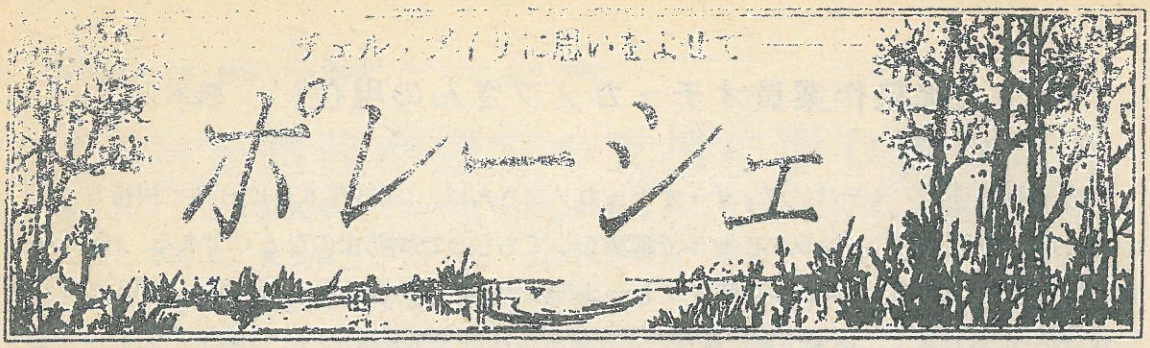
NO. 40. 1997. 7. 31



ジェーニャさん！

ようこそ日本へ！！
（日本各地の仲間と暖かい交流をしました）

11年前に起きたチェルノブイリ原発事故の被災者支援を続けるウクライナの民間団体「移住基金」のスタッフが来日し、中部地方各地で市民との交流を重ねている。

24日は、名古屋国際センターで、被災地の現状などについて市民に報告した。このスタッフは、チェルノブイリ原発事故による汚染地域に人口の３分の１の46万人が住むウクライナ・ジトーミル州から来たエフゲニア・ドンチェバさん(29)。

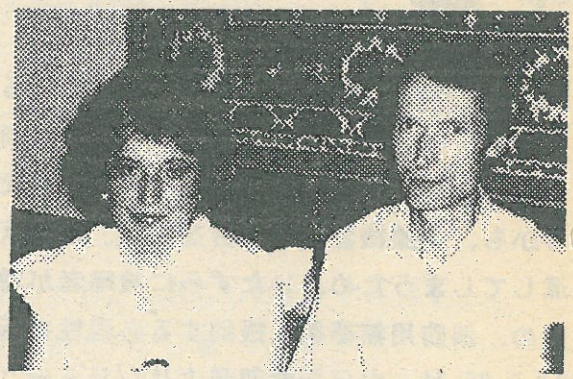
「移住基金」と二人三脚態勢で支援を続けている「チェルノブイリ救援・中部」の招きで21日に来日し、８月２日まで各地を回る。24日は「救援・中部」のメンバー13人に、現状などについて説明した。現地での新たな問題としては、汚染地域で起こる山火事の深刻さを指摘。「汚染地域で山火事があると20代の若い消防士が出動し、そのたびに被曝する。しかも、無線機器が不十分なため、鎮火状態などがうまく伝わらず、不必要な応援まで派遣してしまうため、いたずらに被曝者が増える」と述べ、新たな被曝者を少しでも減らすため、消防用無線機を援助する必要性を訴えた。

（1997. 7. 25. 付　中日新聞朝刊より//ジェーニャさんの紹介記事が５ページにあります）

《事務局》〒４６６　名古屋市昭和区楽園町１３７－１－１０
チェルノブイリ救援・中部　代表：神野英樹
【郵便振替】００８８０－７－１０８６１０
☎FAX:052-836-1073　（月・水・金・10:30～15:30）
（問い合わせは、お名前とシールの番号を明記し、返信用切手を同封の上、なるべく郵便でお願いします。）

《除染作業員オチュカノフさんの現在(いま)》　橋本京子

ヴァレーリー・ステパノヴィチ・オチュカノフさんは、1993年8月に日本に招待し「石棺を閉じた男たち」というタイトルで講演をしてもらった消防士のひとりである。1947年4月5日生、50歳。1986年当時、ジトーミル市消防局消防自動車主任技師。1986年5月5日から20日まで、除染作業に参加。プリピャチ河港や原発敷地内での除染作業を行った。今年5月20日午前、ジトーミル市中心部にある古い一軒家に彼を訪ね話を聞いた。来日当時、すでに健康を害していたが、その後1年間働いた。しかし、血圧の低下めまいなどで出動できなくなり、1994年8月退役。2、3回入退院を繰り返し、その年の12月、身体障害者2級の認定を受けた。ここ3年間、視力が低下し、網膜剥離でレーザーの手術を受けた。2年間保証ということだったが視力の落ちているのが気なる。モスクワ・フィョドールセンターでみてもらったが、もう片方も手術の必要がある。しかし、今は「外国人」扱いだし、レーザーは高いのでまだやっていない。眼底の血管の硬化を防ぐ注射（アクトビギン）を毎日打っている。胃腸も悪い。消化能力が落ち、リネックスというスロバキア製の薬を毎日服用しないと、食べ物がそのまま出てしまう。就寝時、低血圧で心臓が止まりそうになり、頻脈を伴う。記憶力が減退している。足の血管に血栓ができていて手術したほうがよいが、医師は成功が保証できないから止めた方がよいという。症状が特にひどい時は内務省病院に電話して薬の指示を受ける。2年前までは政府からお金が出ていて、チェルノブイリ事故被災者対象の薬局でもらえたが、いまは何ももらえない。



年金はほとんど薬代になる。食べるか治療するかどちらかだ。働きたいが働けない。家の中の仕事をしてもすぐ疲れる。ここの住宅条件が悪く、アパトをもらうはずだったが、3年経ってもまだ入居できない。下水設備はないし、バスルームも無くたらいを使っている。自分の被爆線量は知らない。「赤い森」を通らなければならなかった時、エンジンの故障で30分そこにいた。そこは240レントゲンと測定された。草の上を歩いた人は、足に放射能によるやけどを負った。一週間前に入院することになっていたが、訪問団が来るというので延期した。日本は天国のようだった。死ぬまで忘れないだろう。足が悪くなって、社会保障機関からウクライナ製の車を支給されたが、よく故障し、修理代がでるがとても足りる額ではない。

2度目の妻、スベトラーナさんの話「人々は4月26日にだけ被害者の事を思い出す

救援活動の新たな展開

事故処理作業者の支援に取り組みます

チェルノブイリ原発事故でもっとも激しい被曝をこうむったのは、事故処理に当たった人びとである。彼らはリキデーター（Liquidator　除染作業者）と呼ばれるが、大部分は軍人、警官、消防士である。最大の被曝グループであるにもかかわらず、旧ソ連各地に分散していること、一種の職業上の被曝であることなどから、これまで市民的救援の対象とはされてこなかった。被害があまりに深刻、膨大であるために手を出すことがためらわれたという事情もあろう。

チェルノブイリ救援・中部は９３年にチェルノブイリ事故処理の最前線で働いた２名の消防士（アントニュークさんとオチュカノフさん）を招いた経緯があり、これまでもジトーミル州内務省病院やジトーミル消防署にたいして医療機器や薬剤の支援をしてきた。しかし、それは金額的には微々たるものであり、リキデーター支援という明確な位置づけがあったわけでもなかった。

昨年頃からリキデーター支援に取り組むべきではないかという議論が生まれ、その実行可能性（feasibility ）を調査することが今回のウクライナ訪問の１つの目的であった。訪問団のリキデーター調査グループは１１名のリキデーターと彼ら自身リキデーターであるジトーミル消防の幹部３名から詳細な聞き取りを行った（その他に移住村調査グループが５名のリキデーターから聞き取りをしている）。その結果分かったことは、

① リキデーターおよび事故前後に生まれたリキデーターの子供の健康状態はおしなべて良くない。（聞き取り調査の詳細については本号以降順次報告する予定）

② 消火作業（自然発火を含め森林火災が多い）で汚染地区に立ち入らざるをえない消防士はいまなお被曝している。

③ 内務省事故処理作業者協会というリキデーターの医療・生活支援のための相互扶助組織があり、リキデーターにたいして薬剤の供与を中心とする活動をしている。

この調査結果にもとづき、７月１３日の運営委員会でリキデーター支援について議論した。内務省事故処理作業者協会の薬剤管理態勢についての懸念、職業的被曝者を支援することへの違和感、当面の活動として提案されている無線機と消防服の提供にたいする疑問などが表明された。これらの意見にたいして、行政的な救援が及んでいない点では一般の被曝者もリキデーターも同じであり、救援の対象にしてもおかしくない。現在も続いている被曝を軽減するために無線機、消防服の支援が要請されているなどの説明があり、薬品管理態勢などについて改善を求めることを確認して、内務省事故処理作業者協会を主な対象にして、リキデーター支援に取り組んでいくことで一致した。

「支援を必要とする人を支援する」という救援活動の原点の再確認という意味でも、この決定には重要な意義があると私は考える。キャンペーンの仕方や他のキャンペーンとの兼ね合いなど実務的な問題は残されているが、私たちの救援活動は新しい一歩を踏み出したのである。

田中良明

＜ゼレムリャ村診療所＞ の医療の現状 （1997年 5月視察）

この診療所は、1994年、ゼレムリャ村に移住者用住宅ができた時に開所されました。利用者は、ゼレムリャ村（ 849名）、セレードニャ村（ 137名）、ビシニェフカ村（38名）の合計 1,024名です。ゼレムリャ村の 849名の中には、事故の起きる前から住んでいた村人 569名が含まれており、チェルノブイリ原発事故後の移住者は 280名に過ぎません。しかし、「村人のうち、誰かを支援して、誰かは支援しない（医療の差別化をする）。」等と言う事はありえません。当然の事ですが、被災者もそうでない住民も、ひとたび病気になれば、最寄りの診療所を利用します。

業務内容には、外来患者の診察・定期検診・予防接種・健康相談などがあります。診療所には、1997年 2月11日に赴任したばかりのユーリ所長（内科医）の他に、歯科医師・準医師・助産婦・看護婦・看護士・理学療法士など９名のスタッフが勤務しています。主に、午前中は外来診療を行い、午後は救急往診と慢性疾患患者の定期検診を業務としていますが、一日平均の受診者は、歯科治療へ10名、その他10名、往診 5名程度でした。

ゼレムリャ村の年齢構成は、成人 633名（74%）、18才以下 216名（26%）で、主な疾患は、慢性疾患（糖尿・腎・肝臓病など）・心疾患・高血圧・消化器疾患・関節炎等です。

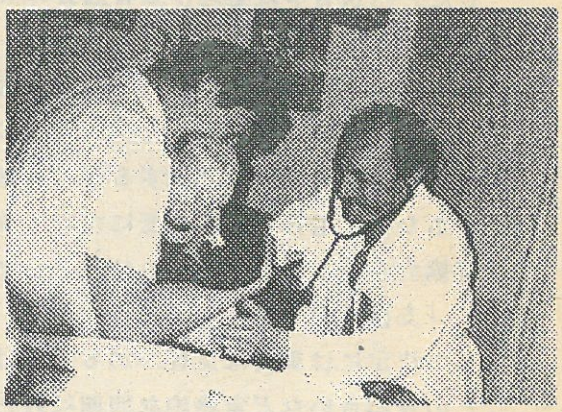
州全体の罹病率との比較はできていませんが、「小児貧血（鉄欠乏性）が多い」との事です。離乳期の栄養不足が原因なのか、放射能の影響なのか、原因は断定できません。しかし、悪性の血液疾患である可能性を考えて、追跡・治療・検診はおろそかにできないと思われます。「事故との因果関係が明らか」と言われているのは、「小児甲状腺癌」だけです。他の「被曝後障害」と言われる疾患は、残念ながら、日常の診療に見られる疾患と区別する事ができません。

診療所に支給される医薬品（鎮痛剤、昇・降圧剤など）は、年間わずか15ドル分です。村人は、「病気になったら、まず地域の診療所で受診し、病気の重さによって、地区病院、州立病院へと送られる」というシステムによって治療を受けます。

「診療所」という性格上、治療を受ける患者の疾患の程度は軽く、必要に応じて、所轄の地区病院である「バラノフカ地区病院」が、診断・治療を行っています。

従って、私達の支援（設備や医薬品）で、当面はゼレムリャ村診療所を運営する事ができるでしょう。

大切な事は、「医療制度の違いを理解した上で、現地の各医療機関の役割を知る事」であり、医療機器の有無で医療レベルを議論しがちな日本的発想は、すこし控えるべきだと思います。　臨床検査技師／松浦千秋；看護婦／神野美知江



子どもの診療をするユーリ所長

ジェーニャさんはこんな人

・・・私達の現地窓口、ウクライナの「移住基金」秘書・・・

ドンチェヴァ・イェフゲニア（愛称ジェーニャ）さんは 1968 年、ジトーミルで生まれ、ジトーミルで育った生粋のジトーミルっ子である。大学の時モスクワかキエフに行こうかとも思ったが、あの都会の喧噪がいやでジトーミルの教員養成大学に決めた。専門はドイツ語と英語を中心にした言語学コース。3才の男の子フィリップ君のお母さんでもある。

Q：いつから今の仕事を？

A：大学を卒業してすぐ、1992 年 3 月に、ジャーナリスト連盟で英語が出来る人を求めていたので就職を希望しました。そして移住基金の仕事をすることになりました。いまの仕事は忙しいけれども満足しています。

Q：毎日の生活パターンは？

A：毎朝 7 時頃に起きて、ママを起こし簡単な食事をとってから出かけます。子どもはママがめんどうを見てくれます。移住基金の事務所はアパートから歩いて 20 分の所にあり、遠くはありません。友人がときどき車にのせてくれます。仕事は 9 時開始で、終り 5 時が定刻ですが、6 時頃になることが多い。時には夜 10 時までかかることもあります。移住基金の仕事の他に、ジャーナリスト連盟の会計の仕事もやることになり、専門学校に通って知識を得ました。でも、使っているコンピューターが古くて、今は全部手作業です。でもおかげで収入は多くなり、何とか生活できるようになりました。

Q：土曜日曜の休日はどのように過ごしますか？

A：土曜日は朝からバザールに出かけて、食材や日用品の安い物を探して買い物です。午前中いっぱいかかります。日曜は子どもを連れて公園や遊園地に出かけます。子どもはメリーゴーランドや子供用の自動車に乗りたがるので、お金がかかって大変です。散歩の時出来るだけ遊園地を避けるのですが、子どもは良く知っていて、あっちだあっちだ、と泣きわめくのです。

Q：日本の印象は？

A ：何もかもが珍しく、他の惑星に来たようです。でもそこには沢山の知り合いが居て、とても変な気分です。町は狭く小さいけれども、どこもきれいで清潔です。

Q：救援・中部の活動について一言。

A：こんなに長く沢山の援助に感謝しています。日本に来て、各地を回り、救援・中部の活動が豊橋でも、岡崎でも、一宮、伊那、名古屋、どこでも沢山の一般の人々に支えられている事を知り、びっくりしました。来る前は運営委員の人たちだけかと思っていましたが、それが間違いと判りました。でも、どうしてこんなに多くの普通の人々が私達のことを心配してくれるのでしょう。私達の国では、みんな自分の暮らしに精いっぱいで、他人の事など考える人はいません。移住基金の人々は、周りから馬鹿か変わり者と見られています。でも、私はこの仕事をこれからも続けたいと思っています。　　（インタビュー：河田昌東）

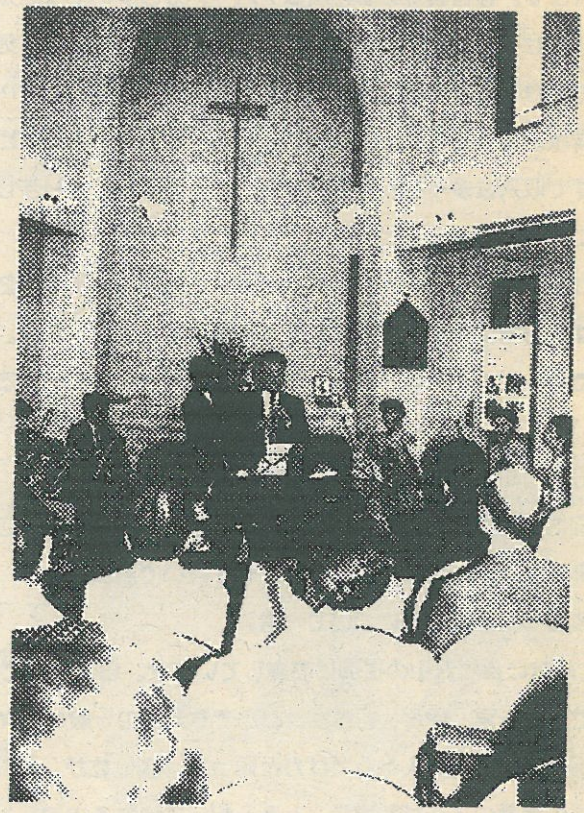
「聖ルカ教会」チャリティ・コンサート

－チェルノブイリの子ども達のために－

6月19日㈭、尾張旭市の「聖ルカ教会」で、チャリティ・コンサートが行われました。このコンサートは、教会でボランティア活動をしていらっしゃる方々の呼び掛けによって実現しました。教会堂に並んだ椅子の数は、およそ１００席。台風６号が接近し、あいにくの天気となったにもかかわらず、足を運んでくださった、ほぼ満員の聴衆を前に、「名古屋フィルハーモニー交響楽団」の主席オーボエ奏者・諸岡研史さんと有志の皆さんによる室内楽団の演奏が始まりました。いつもの救援・中部とはひと味違った趣のイベントになりました。

前半の演奏の後は、諸岡さんと神野代表が対談し、「チェルノブイリの子ども達」に対する支援を参加者に呼びかけました。

しばらくの休憩の後、さらに、神野代表から、ウクライナを訪問した際に撮影したスライドを使って、「チェルノブイリ救援・中部の活動の始まりから、現在に至るまで」「チェルノブイリ原発の事故以来、ますます悲惨の度を強める現地の状況」とりわけ「今もなお、消防士達の被曝が続いている現状」「被曝が発症の要因と考えられる、子ども達の病気の状況」等についての説明がありました。



そして、いよいよ後半の演奏が始まりました。曲は、モーツァルトのアイネ・ナハトムジーク。通常、弦楽合奏で奏でられる事の多い曲ですが、今回は弦楽器が一名ずつの弦楽五重奏の形で演奏されました。

そして、演奏の後、当日の入場料等（10万円余り）が、諸岡さんから救援・中部に、カンパとして手渡されました。

当日、会場へ持ち込んだ本や、ウクライナの民芸品等は、ほとんど売り切れ、救援・中部のメンバーも持ち込んだ甲斐があったというもの。「また、こんなイベントが開けるといいね。」と、スタッフ一同、台風が来るのも忘れ、夜遅くまで語り合いました。

日進医療器（株）より

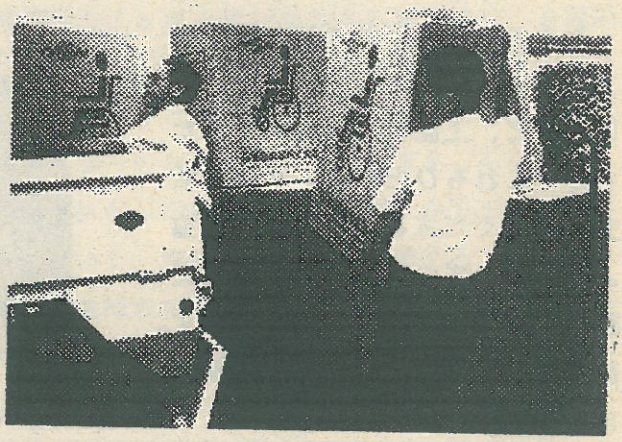
「車椅子１５台の寄付」がありました!!

去る、６月３０日（月）、愛知県西春日井郡に本社のある、日進医療器株式会社より、車椅子の寄付を受けました。　この会社は、今までに何度も、障害者の施設に車椅子の寄付をしているそうです。

今回は、松永和男社長が、ふとした事から私達の活動を知るところとなり、私達の活動に快く協力を申し出てくださいました。

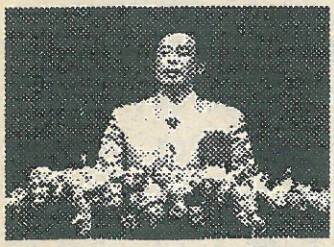
当日は、音羽町の鈴木晋示さんのトラックを借り、無事搬出することができました。

これらの車椅子は、来年の初めに、粉ミルクと共にコンテナでウクライナへ送られ、５月の訪問で出会った障害者の団体等へ寄贈される予定となっています。



ＥＣＣとともに歩む救援・中部

チェルノブイリ事故から11年が過ぎました。被災者の方々の不安をよそに、ウクライナでは人々の関心が薄れつつあります。経済の破綻により、政府も移住政策や被災者に対する補償等を縮小しつつあります。そんな中で、私達の救援活動は被災者にとってますます大きな比重を占めるようになっています。この一年、私達は子ども達に粉ミルクを贈ったり、移住者の村に医療機器や医薬品を贈ったり、汚染地にある「ナロジチ病院」の給水・給湯設備工事を完遂して「生命の水」を贈ることができました。そして今また、「事故処理作業者達の支援」や、「ナロジチ病院のセントラル・ヒーティング工事支援」が始まろうとしています。近年、阪神大震災や日本海原油流出事故により、日本でもボランティア活動が大きな広がりを見せるようになりました。この背景には、ＥＣＣの皆さんの３０年近くにわたる先駆者としての素晴らしい活動があったからにほかなりません。「ＥＣＣ地球救済キャンペーン」のご支援は、現地の被災者の方々に生きる希望を与えています。



贈呈式で挨拶をする神野代表

今年もまた、ＥＣＣより１００万円が贈呈されました。

国際ボランティア貯金（郵政省）から8，344千円の寄附金配分が決定しました！

金利の低迷が続く中、皆さんすでにご存じのように、貯金の利息を財源とする「ボランティア貯金制度」は、厳しい運営を余儀なくされています。

従って、今年度は、申請内容に自信はあったものの、決定の通知が来るまでとても心配でした。

幸いにして、上記金額が認められた訳ですが、これもひとえに、私達の活動を支援してくださる皆さん方のご協力により、一つずつ積み重ねてきた実績が認められたからであると思います。

今後とも、ご支援をよろしくお願い致します。

（1997年 6月18日名古屋市昭和区の郵便局にて）

＜8，344千円の内訳＞

1．州立小児病院支援…	医療機器の購入	（1，116千円）
2．　〃	粉ミルク等の購入	（2，816千円）
3．移住者の村支援…	医薬品購入	（1，482千円）
4．　〃	医療機器購入	（2，263千円）
5．専門家派遣費…	渡航交通費等	（667千円）
合計		（8，344千円）

NIS諸国支援補助金制度（外務省）から5，000千円の補助金交付が決定しました！

外務省の補助金制度に対しては、「ナロジチ病院」と「事故処理作業者」の支援を目的として、申請を行ってきましたが、こちらも申請通りの補助金交付が決定されました。

ただし、この制度は、補助金と同額以上の自己資金を自力で集めなくてはなりません。実施時期にあわせて、いろいろな「キャンペーン」を呼び掛けて行きますので、ご協力をお願い致します。

＜5，000千円の内訳＞

1．ナロジチ病院支援…	病院暖房工事	（1，000千円）
2．　〃	医薬品購入	（1，000千円）
3．　〃	救急車購入	（1，000千円）
3．事故処理作業者支援…	機材購入費	（500千円）
4．　〃	医薬品購入	（1，500千円）
合計		（5，000千円）

ウクライナから一時帰国して

竹内　高明

約 2年10ヶ月ぶりで日本に帰ってきました。日本の町は、いろんなものが新しくて、小綺麗で、至れり尽くせりですけれども、そういう人為の過剰に疲れるときもあります。あんまりモノや情報が多いと、それに人間としての生気を吸い取られてしまうって事もあるんじゃないでしょうか。ホテルとか店で、久しぶりに流れるような敬語の羅列を聞いていると、確かにそれは美しいけれども、やっぱり人の間に垣根を作ってるという気がします。日本では距離をとることが心遣いなのかも知れない。人間同士の均質化が進むと、そういうことになるのかも知れないな。文化とか考え方の違う人たちが接触する機会の多い土地では、はっきりと自分の思いをコトバ化し、肉体的・心理的距離を狭めることに重点がおかれる…のかも知れません。まあこんなことを思ってみても、ただの憶測に過ぎませんけれど。だけど日本にはとにかくモノが多い。人間がたくさん働いて、モノとカネが動いて、更にモノとカネが増える。こういう暮らし方は人間の歴史の中でもごく最近、地球の中でもごく一部において行なわれているんだと言うことを、やたらと「国際化」を口にする日本の人がどれだけ心に留めているのかと思います。いやなんだか偉そうなものの言い方になってイヤですね。ただ私の気持ちとしては、モノはなくてすむのなら無いほうがよろしい。その分働く時間を減らして、空と雲でも見ていたほうがいいと思います。しかしその日本の豊かさの一部でウクライナの人が助けられている、と言うのは、私としてはいろいろと考えさせられてしまう事実です。ほどほどの、楽しい豊かさと言うものはありえないものなのか？　しかしウクライナの暮らしの中で私が感じるのは、楽と言えない生活の中でも、楽しむときにはしっかりと人生および自分の心から喜びをつかみ出してくる人々の偉さです。似た者同士の間で、ほどほどに和やかに触れ合い、小さな違いの中に面白味と己の拠り所を求める日本の人達の暮らしに、私は正直なところあまり郷愁を感じません。ただ日本の田舎の風景には、ウクライナの風景とは違う美しさを感じます。日本の人達の心の中にも、以前は見つけにくかった広がりを感じることがあるのも、私の視野がウクライナで広がったせいかも知れません。そうはいってもやっぱり、国と言うものを一つの枠にして、人間とか社会にはめて考える流儀は私には馴染みません。「日本人」という自覚は、私にはほとんどありません。たまたま生まれて育ったところが日本だっただけです。どんどん外国に出かけてモノを買い、カネを使い、出先の人達の生活にどんどん影響を与えているわりに、「日本人は日本人」と思っている日本人が多いんじゃないでしょうか。まあ道徳の先生みたいなことを言いたくはありません。ただ、絶えざるモノの流れに身を浸し、澱みにうかぶウタカタのように虚ろな心を漂わせているヒマがあれば、ほかにも面白いことは世界にいろいろあるぞと思うばかりです。私は私なりの面白さを見つける場所で世界に出会いたい。いろいろ書きましたが、キエフでも頼もしい日本の若者たちに出会い、仲良くなれて嬉しかったことをここに付記して結びとします。

静岡・星美学園から
全国の学校へ同時中継

－ザハルチュク医師講演－

浜松・聖隷病院で研修を受けていた、ウクライナ・ジトーミル州立小児病院小児科のザハルチュク医師が、6月3日、星美学園に招かれ、子供たちに講演しました。

星美学園では毎年、粉ミルクを贈るミルク・キャンペーンやクリスマスのカード・キャンペーン、その他学園独自の取り組みなどを通して、チェルノブイリの子供たちを支援する活動が続けられています。

オルガ・ザハルチュク医師を招いて同学園で講演会が開かれ、その様子がマルチメディア会議システムを利用して全国の小・中学校に通信回線を通じて同時中継されました。

講演会では、ザハルチュク医師が「子供のための治療費や汚染されていない食べものが足りていない。子供たちの将来が心配」といまだに事故の後遺症におびえる現状を訴えると、画面を通し全国の参加校からも質問が寄せられていたということです。

ジトーミル州立小児病院の小児科オルガ・ザハルチュク医師は、浜松聖隷病院での約一カ月間（5月12日～6月7日）の医療研修を終えて、無事ウクライナに帰国しました。日本で学んだ多くのことは今後ウクライナでの子供たちの診療に活かされることでしょう。

ザハルチュク医師は病院での研修のほか、広島の原爆資料館の見学や名古屋での交流会、京都見学などでも異文化に対する大きな興味関心を示し、新しいこと、珍しいものをなんでも吸収しようと言う熱意が感じられ、さわやかな印象を残し帰っていきました。

なお、州立小児病院マルチェンコ院長から研修に対する感謝の手紙が届いています。多大なご協力をいただいた聖隷病院並びにお世話になった関係者の皆様に救援・中部からもお礼を申し上げます。

ユーリさんからの手紙（要約）

セルゲイの具合ですが、検査の結果容体は安定しています。医者の言った通り、手術後一番危ない時期は２年目です。しかし、今使っている薬で大丈夫だろうと思います。今のところセルゲイは短大の入学試験の準備をしています。時々疲れて少し痛みを感じますが一般に気分はいつも通りよいです。

私のことですが、もう休暇が始まっていますが暇はなかなかできません。学校のすべてのプログラムを作成し終わるとすぐ新しい用事ができました。ある旅行会社に頼まれて観光のための資料を作り始めています。妻はまた夏の間中働いていませんからその仕事が必要になったのです。今年の秋そして来年の冬２回日本へ行く予定があります。滞在は全部で３・４カ月です。秋には宇部市、冬は浦和市です。その後日本語の問題が今少し少なくなるのを期待しています。　　９７．７．１０　　ユーリ

／ セルゲイ君支援金は５／１から７／３１の間に、新に１７２，５００円集まりました。これで今年一杯の治療のメドが立ちました。ご協力に心からお礼を申し上げます。引き続きカンパを募っております。

口座番号は　００８５０－５－６５３１　「チェルノブイリ救援・岐阜」

お問い合わせはTEL/FAX 058-272-2348 新田まで

ミルクキャンペーンにと募金１８、５７０円寄託

チェルノブイリの被災者に心を寄せて下さっている岐阜市の県立長良養護学校の生徒さんたちが、今年も募金を寄せて下さいました。

現地のこどもたちに、汚染されていないミルクをのませてあげたいと、６月に開かれた「ふれあいの日」に募金活動をして下さったものです。私たちは、生徒集会にお邪魔して現地の状況をお話し、生徒会長さんから募金をいただいてきました。贈呈式の模様を見守っていた生徒さんたちの目がキラキラ輝いていたのがとても印象的でした。ありがとうございました。心から感謝申し上げます。

訂正　先号のポレーシェ中「チェルノブイリ救援・中部の収支報告」（１９９６年４月から１９９７年３月まで）のうち、以下の部分を訂正します。

郵送費・通信費	（誤：541,311 円、正：1,267,371 円）
印刷費	（誤：238,903 円、正：301,284 円）
備品・消耗品	（誤：192,032 円、正：211,445 円）
ポレーシェ発行費	（807,854 円：削除）

（注）これは、ポレーシェ関連項目の費目変更に伴うもので、収支総額は変わりません。これにより、郵送費・通信費のうち、

ポレーシェ関連は：1,129,791 円

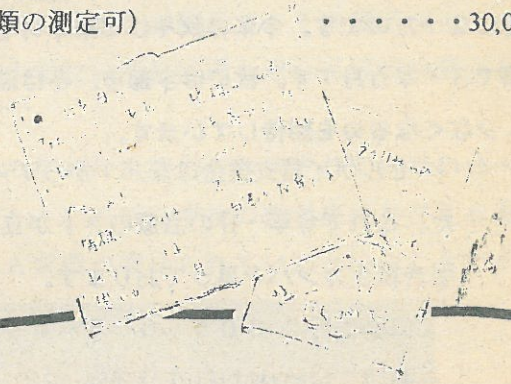
印刷費のうちポレーシェ関連は：108,869 円

備品・消耗品費のうちポレーシェ関連は：26,841 円　となります。

お知らせ

◇コバレフスカヤ講演「ビデオとカセットテープ」送料共 ・・・・・・500円
◆救援・中部のTシャツ ・・・・・1,500円
◇とどけ鳥のデザインのオリジナル・ステッカー ・・・・・・・200円
◆絵はがき集（チェルノブイリの子どもたちの絵５枚セット） ・・・・・・・300円
◇手紙集「たった１回の原発事故で」（救援・中部編地湧社刊） ・・・・・・500円
◆「とどけウクライナへ：私たちの救援日誌」
（坂東弘美著：八月書館） ・・・・・1,600円
◇「ネチポレンコさん・ライサさん講演集」専門家解説付き ・・・・・・350円
◆「私たちの涙で雪だるまが溶けた」
（チェルノブイリ支援・九州刊） ・・・・・1,300円
◇放射能測定器「シンテック」（被爆線量直読） ・・・・・・10,000円
同上　「プリピアチ」（３種類の測定可） ・・・・・・30,000円

◆被災者からの手紙集・第２集が完成しました。事故１０周年にあたり救援・中部から出した手紙にたいする５６人からの返事です。被災地の生活がよくわかります。実費送料とも400円。振り込みでお願いします。手渡し200円。



事務局だより

「太陽光線がこわい？日焼け止めですって？天気が悪いから海に入らない？なんてもったいない！」ウクライナからやって来たジェーニャさんは、少しでもたくさんの日差しを浴びようと、台風の余波で波高い大磯の海に入って行った。来日中のある日の出来事。
現地の移住基金での神経をすり減らす仕事から開放される時間を作ってあげたいという、私たちの思いを受けて、彼女は実に無邪気につかの間のひとときを楽しんでいた。彼女のおかげで、私たちも「思いがけない夏休み」のひとときを過ごせたけれど、寄る年波（？！）にはさすがに勝てず、正直のところちょっとバテ気味です。ジェーニャさんは８月２日関空から無事帰国しました。（山盛）

編集後記

・久しぶりの、元気な竹内君の顔。ゆったりとした、暮らしのテンポを見ると、今しばらく、彼は「現地駐在」がよろしいかと…。（寛）
・この夏、ウクライナは珍しく長雨が続いていると言う。東欧では大洪水、日本は連続台風…一つの星の話。（京）
・日本人も、滅多に行かない夏の京都。「会いたいな」と思っていた知人に会い、近況を語る。ウクライナの友は、思わぬプレゼントをしてくれた。（美）
・交通渋滞、外食産業、自販機、コンビニ、使い捨てカメラ、プリクラ…。ジェーニャさんの目に、日本がどう写ったのかちょっと心配。でも、僕たちの暖かい心は、大切に持ち帰ってくれたよね。（Ｊ）